

地図とわたし

歌手 加藤登紀子



1. 世界で出会ったさまざまな地図

〈編集部〉

地図と聞いてまず思い起こすことは何ですか？

〈加藤〉

地図は新しい発見と驚きを与えてくれるものですね。私が最初に旅行したのはヨーロッパで、コンクールに受かったごほうびとしてドイツ、フランス、イタリアへ行ったのが初めての海外経験でした。その時はあまり考えなかったんですけど、それからしばらくして、1972年に一人で中東からヨーロッパまでを旅したことがあって、その時にふとしたことでヨーロッパの地図を見ました。けっこう古い一枚の世界地図です。その地図を見ると、当然のことながら大西洋が真ん中にありました。そして左側にアメリカがあって、右側にユーラシア大陸があるのですが、その地図の右端は切れていて日本はないんですね（笑）。日本が極東といわれていることは頭では知っていたけど、その地図を見たときにその意味が本当にわかりましたね。ああ、外国の世界地図では日本が世界の端にあるのだと。日本の地図では太平洋と日本が真ん中にあります。世界各地ではどんな世界地図を使っているのか、私は調べてみたいと思いましたね。

〈編集部〉

ヨーロッパにはヨーロッパ中心、アメリカにはアメリカ中心の地図があるということです。

〈加藤〉

アメリカが真ん中だとインド洋が半分ずつになるんでしょう。

〈編集部〉

はい、ユーラシア大陸もふたつに分かれ、おもしろいことにその切れたところがアフガニスタンで、アメリカ

の一番反対側にあることがわかります。

〈加藤〉

おもしろいですね。南半球に行くと、南が上になった地図があるそうですけど、さかさまになっている地図を見るのはすごく変な気がするでしょうね。だから、太平洋と日本が真ん中にある世界地図の形というものが、どれだけ私たちの頭の中にこびりついているのかということですね。日本がないという地図に出会ってはじめて「ああ、極東の小さな島国に私はいるのだ」ということを実感したわけです。そして、世界の人たちが日本をどう見ているのかということもわかった気がしました。きっと、世界に出ていったときに、「ああ、遠い国から来たね」というふうに思われてますね。その遠い国という印象の日本は、確かにヨーロッパの人にとってあこがれもあるのでしょうか。

2. 音楽を通して見えてくる世界観

〈編集部〉

加藤さんにとって音楽を通して見えてくる世界はどのようなものですか？

〈加藤〉

フランス人の詩人と一緒に一つのアルバムを作ったことがあるんです。その人はインド哲学をやっている人ですね。彼は「私は東洋にあこがれていて、あなたはフランスに向かって旅をしてきた。だから両方で音楽を作れば、きっと世界を一つに抱きしめるような関係になれる。だから一緒に音楽を作りましょう」ということになって、彼は私にいろいろな詩を書いてくれました。たとえば、私が作った沖縄旋律の歌に、彼は『メディナ』というアラブの街をイメージした仏詞をつけたんですね。沖縄旋律の歌が彼にはアラブの旋律のように聞こえたんですね。私たちが日本のだと思っているもののティストがいろいろなカーテンをくぐってヨーロッパまで行っていることがわかります。

彼らにとってアジアの始まりはトルコです。トルコのイスタンブルではアジアとヨーロッパがすごくはつきり意識されています。ボスポラス海峡の向こう側はアジアという意味のアナトリアで、すべての地名にアナトリアがついてます。つまり、ここはアジアです、そこもア



帝国書院地図帳より

ジアですと地名が示しているわけね。アジアの城、アジアの岬と、それぐらい向こうはアジアという意識が強いんですね。だから、フランス人の感覚からすると、ギリシャから先のオリエントはトルコ、さらにそこから先はずっとアジアなのです。日本もアジアの国だと思っていたとすると、彼はトルコに行ったときでも日本に近い感じを持つんでしょうね。

フランス人の彼は『メディナ』という詞のほかにコロンブスの詞を作りました。コロンブスが金・銀にあこがれてジパングをめざしたという曲で、まさに地球を一周するようなアルバムでしたね。彼によれば、コロンブスはジパングをめざしたのにアメリカに上陸してしまい、先住民族を殺してしまった。その戦いを歌った『メキシコの戦い』という歌が、このアルバムの中にはあります。このように日本を題材にした世界をしばしば作ろうとする時、彼らにとっては、日本と中国の違いを区別することは大変難しいようです。私もヨーロッパなどで出演するとき、今日は日本からのお客様だと紹介され、BGMに中国の曲が流れたりします。「この曲は日本の音楽ではなくて、中国の音楽ですよ」と私が言うと、「あっそうですか。ぜんぜん気がつかなかった」と言うんです。そのくらいたくさんのかーテンの向こうに日本という国はあるわけです。このような世界観があることに気づくのもおもしろいですね。だから、一冊の地図帳の中にもう少し余裕のあるページの使い方ができ、いろ

いろな視点から見られる世界地図が入っている地図帳があるといいと思います。

3. 地図を手にして歩く

〈編集部〉

普段の生活で地図との接点はありますか？

〈加藤〉

私は、コンサートで各地に行くので、手帳も地図が入っているものを持っています。かつては白地図を事務所に貼って、訪れた町に印をつけていました。この年に行った町はこの色、あの年に行った町はあの色というふうに印を付けた所、近頃行っていない町が一目でわかるんですね。そうした作業を思い立って2~3年続けました。それから、私は本当に地図を見るのが好きで、自分が出かけるときはいつも行き先を必ず地図で確認します。以前行ったことがある所と近い場所だとか、どこの町とどういう位置関係になっているとか、いつも丁寧に地図を見ます。私は歌手ですから、やはり大きな町に行くことが多いですが、たまに知らない町に呼ばれると不安になることがあります。そんなときに地図で場所を確認すると安心します。実際にそこへ行ってみるとすごくいい町だということもありますし。

〈編集部〉

そのようにして地図から見えてくるものは何ですか？

〈加藤〉

たとえば駅がない町であれば「田舎」という印象を持つことがあります。でも、逆にいろいろなものが全国津々浦々まで伝達できる時代になってくると、かえって駅がない町にはすごくいい文化が残っていました。つまらない建物も少ないし、一時は駅がないことで斜陽だという悩みもあったかもしれません、逆にそれでいい町になっていたりします。私にはそういう旅が多いです。それとびっくりするのは、日本には城下町が多いということですね。かつてお城があった町には、きちんと文化が伝わっています。

私が以前、五島列島の福江島という所に行ったときにも、江戸時代の最後に造られたお城がありました。そのお城は建てている途中で廃藩置県がおこり、仕上がらなかつたと聞きました。お殿様はそのとき東京に来ていて、途中でもうお城は不要になり、お城を造るためのお金を赤坂で全部使ってしまったという逸話を福江島の方からうかがいました（笑）。地図の上では小さな島にしか見えませんけど、実際に行ってみると案外大きな島でした。地図でいろいろな記号を探して見ているだけでも楽しいし、あれこれと考えるうえでもとても役立つと思います。

4. 地球的課題を考えるⅠ

～ヨハネスブルクの地球サミットから～

〈編集部〉

ヨハネスブルクでの地球環境サミットはいかがでしたか？

〈加藤〉

今年の会議はよくわかりませんでしたね。何か一体感を持って、いい方向にいこうという雰囲気が伝わってきませんでした。そのような会議ではありましたが、おもしろい話を聞くこともできました。

アフリカの女性が集まったある女性会議では、南アフリカの女性の農業都市大臣が議場に入ってくると、聴衆の女性たちが立ち上がって一斉に拍手とコーラスがはじまります。その大臣は、アフリカでは本当に女性がよく働いて、アフリカの暮らしは女性によって支えられているという話をしてました。たとえば、アフリカの女性が頭に水がめなどを乗せるようすをよくみますが、あれは

女性の仕事なんだそうです。そこで私は仲間のアフリカのミュージシャンに、「あの仕事が男にできないはずはないでしょう」と聞いたのね。すると、アフリカの男性は「あれは女性にしかできない」「女性はすばらしい、あんなに重いものを頭にのせて仕事ができるのだから」と答えてくれました。だけど、実はただ男性が仕事をしないだけんですよ（笑）。重いものをかづぐ、頭にのせて運ぶ、赤ん坊をおんぶする、それから畑をたがやす、要するに育児にかかわること、肉体で仕事をしなくてはならないことは、全部女性がするのだそうです。だから、アフリカの女性は男性の100倍は働いているといわれています。

〈編集部〉

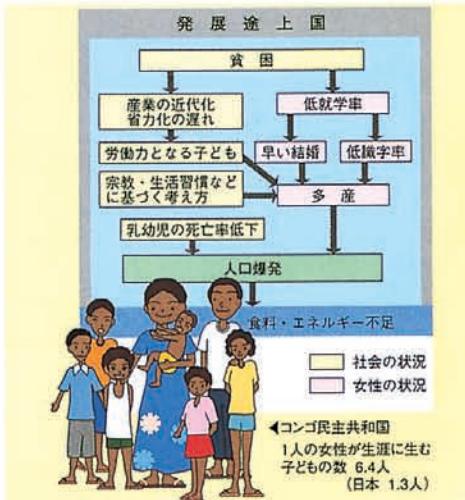
アフリカでは女性が社会を支えているということがよくわかりますね。

〈加藤〉

どこから水を運んできたらいいかとか、どこから薪を取ってきたらいいかとか、暮らしのすべてを女性がマネジメントしてきました。しかし現在、会議を開こうとしたときに、そのテーブルに女性が呼ばれるることはほとんどなく、それはおかしいのではないかという話もありました。考えてみると、女性が暮らしのまわりの労働をほとんどしてきたというのは、1万年近く変わっていないかったかもしれませんね。男の人はたぶん獣に行っていたでしょう。しかし、家の周りに畑を作ったり、薪を取つたり、水をくんだり、子どもを育てたりという、陣地の中でやる労働はみんな女性がやってきたんです。それを現代に置き換えてみると、男の人は戦争と政治をやっている。戦争と政治をやっているのだけれど、それにかかわらない男は「ほとんど寝ているだけ」とその女性は演説したのです（笑）。ただ、それは非常に悲惨なことで、多くの男性が失業しているということを意味します。

また今回の会議では、未開発の場所をなくしましょうということが宣言の中でうたわれています。私はそれがとても心配なのです。いわゆる未開発といわれているものの中に、私たちがこのまま遺産として残してゆくべき風俗や生活習慣がきっとまだあると思います。民俗学者や写真家にとってありがたくてたまらない自給自足社会が、植民地になるつい数十年前までのアフリカには残っ

ていたはずです。



帝国書院資料集より

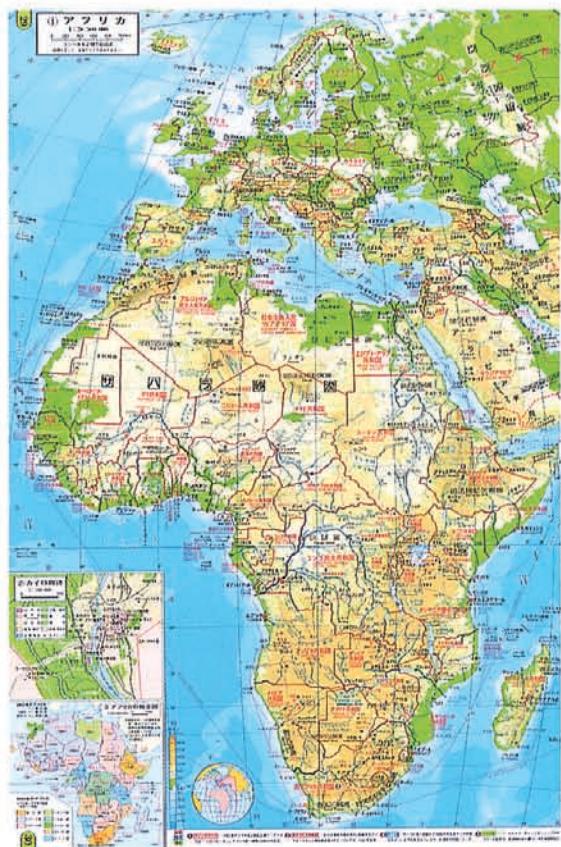
〈編集部〉

未開発の社会というのは、非西洋式の社会のことですね？

〈加藤〉

そうです。アフリカは貧しいと言われていますが、ある女性が立ち上がり「私たちをアフリカと呼ばないでください、私たちはこんなに豊かです。こんなにきれいな服を着ています。これは自分の村でつむいだ布です。そして自分たちの飲む天然の水もある。それをリッチと呼ばなくてどうするのですか。お金はないけれども、私たちのこの豊かさを何も知らずに、アフリカという言葉で片付けることはやめてほしい」という発言をしました。今、一生懸命正しいことをしようとしている西洋式の社会の人が、「貧しい人がいない世界にしましょう」と言っている。その言葉はとても美しいのだけれども、何を貧しいと呼ぶのかということが重大な問題だと思います。

私もこの仕事にかかわるようになってから初めて知ったのですが、G N P (国民総生産) というのは、山に森林があるという場合にはゼロです。そこから全部木を切り出したという場合には、膨大なG N Pが生まれます。山や森林がお金に換わったとたんG N Pが高くなりますが、もしそこに雨が降って大水になると、大被害が生まれる。そこで、大被害を復興させようと河川の工事など



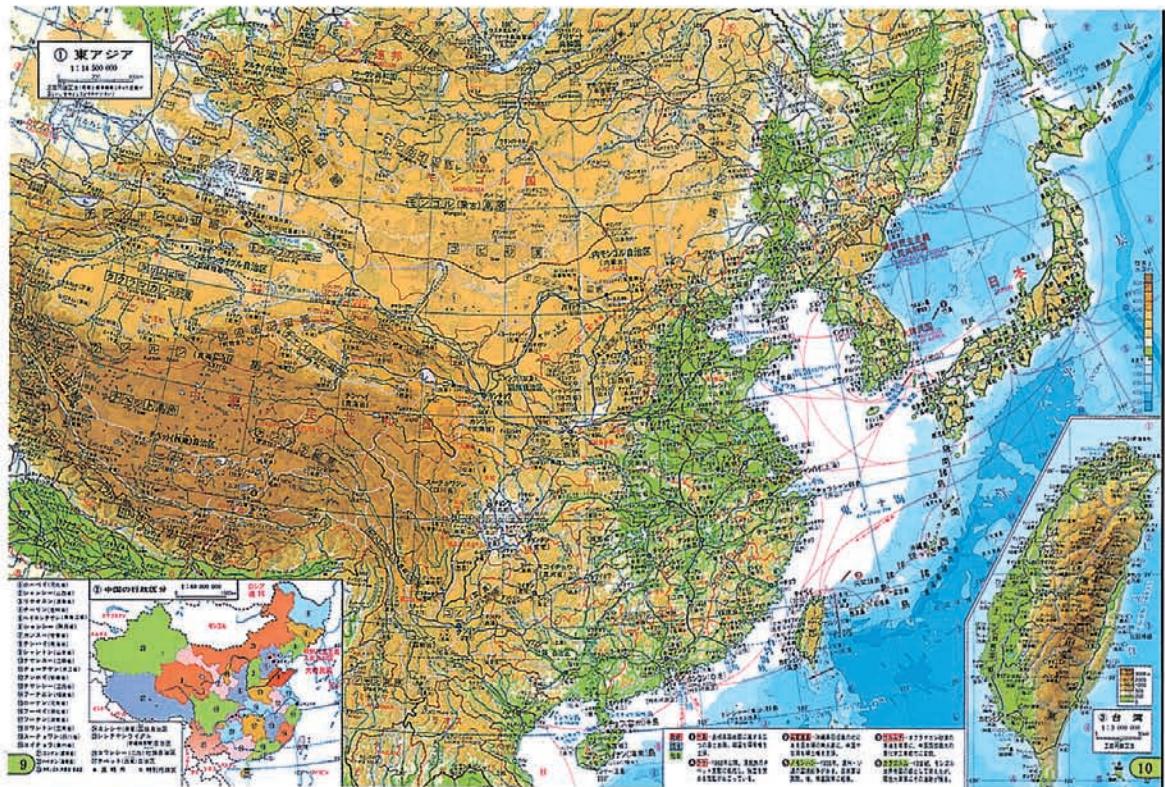
帝国書院地図帳より

をすると、お金が投じられる。それがまた大きなG N Pとなるのです。そうするとさらに山や森林を切って、というサイクルでG N Pが高くなっていく。だから、お金はないけれどリッチだという人々の言葉に、私たちは耳を傾けなくてはいけないと思いますね。けれども、西洋式の尺度からすると、まったく正反対の評価になってしまう。地球環境問題が深刻な今、山が全部そのまま、川は全部そのまま、そうしたG N Pゼロの場所こそが宝物なのに。西洋式の社会にとってリッチではないものがそのままある所こそ、本当に残さなくてはならない富なんですね。

このごろ、私たちが学生の頃には見たことがない新しい地図が増えてきて、とても感動します。世界にはどのような自然が残されているのか、どういう暮らしがそこに存在しているのかなど、地図からくまなく調べられたらどんなにいいだろうと思います。人口が増えてきて、いろいろな場所に散らばってきているから、相当の秘境

まで人が住んでいると思いますが、環境問題で今最も急激な変化が起きているのは、この星がどんどん温暖化していることにあります。地球の大気は何百万年という間、ほぼ一定の温度に保たれてきたのに、最近は非常に大きな変化となって表れています。私たちは温暖化と簡単に

言葉を使いますが、2~3℃の変化だけでも植生が変わってしまったり、海岸線が水没したり、動物が絶滅してしまったりします。温度を保ってきた奇跡こそ、この地球の海や森、生物が生きている証で、本当にすばらしいことだと思うのです。



帝国書院地図帳より

5. 地球的課題を考えるⅡ

～モンゴルの旅から～

（編集部）

ほかに关心をよせている地球的課題はありますか？

（加藤）

私は2001年はモンゴルにも行きました。モンゴルは砂漠がほとんどの国、でもモンゴルの人はすばらしいです。私たちからすると、砂漠しかなかったらどんなに恐ろしいだろうと思いますよね。でも、彼らは砂漠や草原が自分たちに与えられた大自然という歴史の上に生きてきたわけです。チンギス・カンは、あんなに何もない、資源的にも豊かとは言えない国に生まれ、大きな国を作った

人です。彼が作った「チンギス・カン法典」の中に、「川の流れを絶対に変えてはいけない」というものがあります。ほとんどの川は蛇行して走っていますが、それをまっすぐに流れさせてはいけないという教えです。河川を直線化することで水がいっぺんに流れてしまい、土地を潤すことができなくなってしまう。蛇行しているのはありがたいことなのだというのです。さらに、「川の水をいただいて飲もう、けれども使った水は絶対に川に流してはいけない」という教えもあります。使い終わった水、汚れた水は必ず土に返すのです。かつては日本でも当然そうしていたわけで、土に返せば土の肥やしになるということです。そういうことを13世紀くらいに言っているんですね。これは、最近の日本の環境整備政策が

忘れ去ってきたことです。汚水を全部川に流し、流れを全部直線にし、護岸をしてしまった。それにもかかわらず、インフラ整備とかで、世界中でも上水道、下水道をいまだに完備させようとしています。下水を川に流さず、土に返そうという考え方方は今、緊急課題ですね。チンギス・カンがいけないと言っていたように、汚れた水を川に返すと恐ろしいことになります。

さらに私は砂漠の中にあるラマ教の寺院に行って、驚いたことがあります。今は壊されてしまってがれきの山なんですが、寺院があったという丘の上に井戸があり、こんこんと飲み水がわきだしていたのです。たぶんどこかの高い山と地下水脈でつながっているのでしょうか、それを昔、お坊さんが見つけたのですよね。その水のおかげで、砂漠でも人が住めるようになっている。山に降った雪が地下水となり、遠く離れたところまで流れ着くわけですからまさに自然の神秘です。そういう奇跡がこの地球を人が住めるような場所にしてきたのです。それから、砂漠なのに井戸が掘れるという秘密の一つに永久凍土の存在があります。

地図を見るとモンゴルに砂漠が広がっていることは一目でわかりますが、よく見ると北海道以上に北にある国だとわかります。さらにモンゴルは内陸・高地ですから、冬はとても厳しい気象条件になります。ゴビ砂漠などでは一年に12mmくらいしか雨が降らないのに、それが地中1.5mくらいのところで永久凍土という氷の層に受け止められて天然の氷槽になっているんですね。このことも昨年、モンゴルに行って初めて知りました。ところが恐ろしいことに、その永久凍土が溶けようとしています。地球温暖化の影響もあるのでしょうか、溶ける原因の一つは地面を掘るからなのだと思います。

かつてチンギス・カンは、決して土を掘ってはいけないと言っていました。彼が永久凍土を知っていたかどうかはわかりませんが、土を掘ってはいけないという言い伝えがあるのです。ウランバートルの空港は土を掘るために滑走路が15度くらいかたむいていると聞きました。近年、モンゴルを助けるためという名のもとに植林活動が行われていますが、もともと砂漠だったところには決して木は育たないということをモンゴルの人たちは知っています。さらに彼らは畑も耕してはいけないといわれたくない、地表を触るということに対して恐れを持

っています。だから彼らはもともと農業をしないのですが、食生活は変わってきます。かつては動物の血液、ミルク、山の木の実などからビタミンをとっていたのですが、現在は野菜を食べないモンゴル人はいないでしょう。17、18年前にはモンゴル人は決して畑を作らず、野菜を作っていたのはもっぱら中国人だったのですが…。このような形で自然環境や文化が壊れていくのは皮肉としか言いようがありません。

6. 地図と親しむ

〈編集部〉

地図とかかわりのあるさまざまな体験をされておられますか、地図と親しむ簡単な方法はありますか？

〈加藤〉

たとえば、グルジアという国がありますね。これを日本語ではグルジアと呼びますが、アメリカではグルジアのことをジョージアと呼びます。『ジョージア・オン・マイ・マインド』という歌があったり、ジョージアという名前の州もあったりするから、そこには何かつながりがあるんでしょうね。そしてジョージアを仏語読みにするとジョルジュになります。それからボヘミアンという言葉があるでしょう。あっちこっちほつつき歩く人、あるいはびりびりの服を着た人のことをボヘミアンみたいと言いますが、その言葉がどこからきたかご存じですか。

〈編集部〉

ヨーロッパですね？

〈加藤〉

チェコのボヘミア地方に由来する地名です。ボヘミアンと言ったときに、ふとカウボーイとかカウボーイハットとかが思い浮かびませんか。でも、もともとはボヘミア人という意味しかないんです。ところがおもしろいことに、チェコの音楽とカントリーミュージックはものすごく近い音楽なのです。おそらく、かつてボヘミア地方からアメリカに多くの人が移住したのではないかと思います。カントリーミュージックの原点はボヘミアなんですね。地名からいろいろなことが見えてきておもしろいですね。



帝国書院地図帳より

〈編集部〉

同じ地名には何らかの関連があることが多いようです。

〈加藤〉

『パリ、テキサス』という映画があるでしょ。この映画は、離婚して一人ぼっちになってしまった男が、テキサス州のパリにお父さんが買ったという土地をさがしに、砂漠の中をてくてくと歩いているところから映画が始まります。アメリカにはあちこちにパリがあるんです。ケンタッキーに行った時にもパリという街がありましたね。

それと、私は京都の加茂川のそばで育ちましたが、現在は千葉県の鴨川というところに家と農場を持っています。京都の加茂川は京都市街で高野川と合流して鴨川になります。一方、千葉県の鴨川は町の名前には鳥の「鴨」を使いますが、鴨川の中には加茂川という名の川が流れています。昔、京都から千葉の鴨川に来た人が命名したのではないかと想像せざるにはいられません。

〈編集部〉

千葉県の白浜なども、黒潮にのって和歌山の白浜から来たのではないかと言われていますので、京都の鴨川と千葉の鴨川も結びつきがあるかもしれませんね。

〈加藤〉

さらに、十津川という所が奈良県にありますが、北海道にもあるのです。もちろん全国には同じ地名がたくさんありますが、北海道の新十津川というのは歴史があります。かつて奈良の十津川が大水になったときに、何百人の住民が移り住んだのです。いろいろな移住の形があるのでしょうが、災害をきっかけにたくさんの人が移住したという経緯があり、歴史を感じる地名だと思います。



帝国書院地図帳より

7. 今後の地図に期待すること

〈編集部〉

今日はいろいろな地図の使い方・楽しみ方、体験をお話しいただきました。最後に、今後の地図帳に期待する点はありますか。

〈加藤〉

いろんな意味で今、価値観は変わりつつあると思うんです。大きく、大量生産がもてはやされた時代は過ぎ去りつつあります。近代的なモノではなく自然に近いモノのほうがいいという時代になりつつあります。しかし、感覚的には皆わかっているのに、数字の尺度にはいまだにとらわれています。世界でG N P が1番とか、2番とか、そういう尺度だけは、通信簿みたいに皆の感覚の中にインプットされているのです。こうした尺度では測ることのできない大切なことを伝える情報があればよいと思います。たとえば、どこが森をたくさん所有しているかなど、お金に変えられない価値を見つけられる地図ですね。

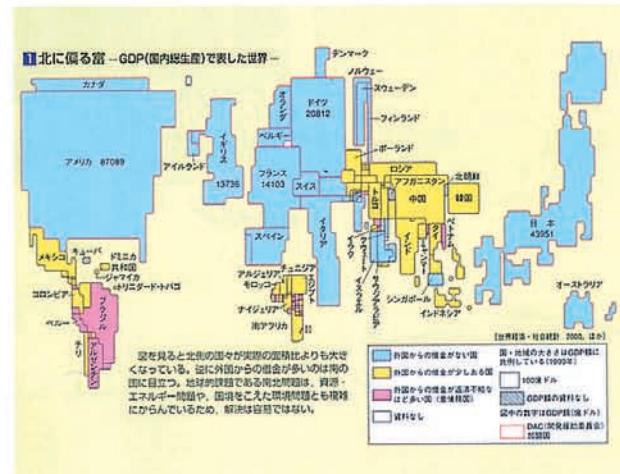
ソ連からロシアに転換したばかりの混乱期に私が訪問したロシア人の友の家では、市場に物がないのに、窓にはきれいなレースのカーテンを付け、テーブルには真っ白なクロスを敷いていました。そして、手作りのクッキーや料理でごちそうしてくれたことに暮らしの豊かさを

肌で感じました。彼らはとてもさびしそうに「失業している」なんて言っているのに、結構豊かな生活をしています。畠や自分の庭にりんごの木を植えたり、さくらんぼを作ったり、しています。これに対し、お金持ちといわれる私たち日本人がなぜ豊かさを実感できないのかと言うと、日本では何をするにもお金がかかるからです。貨幣価値は高いけれど、家賃などもすべてが高い。電気製品などすべてそろっているけれど、それを買うためにものすごく働かなくてはならない。だから、私たちは結局ラーメンをすすって、十何時間労働したりするのです。そういう生活を見ていると、私たちは何を目的にG N Pを高くしなければならないのだろうかと思いますね。こうした問題をしっかりとと考えられる地図帳があればよいと思います。

〈編集部〉

ありがとうございました。

(2002年10月9日、加藤登紀子さん事務所にて)



帝国書院資料集より